期　昭和五八年五月三〇日～六月一八日
於　図書館三階閲覧室（本館）

軍記物語

軍記物語とは、広辞苑によれば、「合戦を主として時代の展開を写した叙事詩的文学。鎌倉時代に多く作られ、保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記がある。武将の個人的生活を主題とした義経記や曽我物語を含めることもある。」である。今回は、この軍記物語の範疇に入る物語を本学所蔵の資料の中から二、三選んでみた。

(1) 平家物語　長門本　（常磐松文庫）

写本一〇冊（二〇巻）　美濃判　十行書き　文政一三年（一八三〇）、小山田与清本により源輳書写。小中村清矩著「国史の栞」には、長門本に関して、「此の書に、多くの類本あるによりてならむ。其の中に、長門本とて、長門の阿弥陀寺に伝へたるは、文体いたく違ひて、普通本に載せざる記事多し。全く別本としてみるべし。」とあるが、日本文学大辞典には、「平家物語が最初に成立した当時は三巻から成っていたものらしく、それが増補改修せられて六巻となり、更に十二巻となり、次いで灌頂の巻が分立するに至り、また別に二〇巻の長門本や四八巻の源平盛衰記を派生したもののやうに思はれる。」とある。

(2) 義経記　（常磐松文庫）

版本八冊（八巻）　美濃判　十二行書き　正保二年（一六四五）刊

義経記は「よしつねき」ともよむ。また「判官物語」、「牛若物語」、「義経物語」とも称せられる、室町時代成立の物語で、源義経の幼年牛若丸と称した時期から、兄頼朝に追われ、奥州にて殺害されるまでを描いた一代記であり、弁慶の活躍なども含めた波瀾万丈の物語である。

(3) 承久記　（国文科研究室別置本）

木活字本二冊（上・下巻）　美濃判　十二行書き片仮名混り。寛永版と版式は同様であるが、傍点付無刊記。

成立は、室町時代以前といわれる物語で、承久三年の乱、つまり後鳥羽院が北条義時を討伐せんとして、事をおこすが、成功せずに隠岐に流されるに至る顚末を記したもの。

(4) 奥州後三年記　（常磐松文庫）

版本三冊（三巻）　美濃判　絵入　寛文二年（一六六二）　京都　林和泉掾刊　外題「奥羽軍記」。書き入れあり。

絵巻物は、「後三年合戦絵詞」などといい、詞書だけを集めた物語は、「奥州後三年記」という。また、別称は、外題の「奥羽軍記」、その他、「後三年軍記」などがある。序文に「貞和三年（一三四七）法印権大僧都玄慧」の名があることから、室町時代になって書かれたものといわれる。